

実施報告

図書館を学生と共働で創るための活動

— モニター活動の取り組みから見えること —

荒井 翔平 堀口 健 林 真紀

横浜キャンパス図書館では、図書館が開館した 1997 年に「図書館学生モニター制度」を導入し、図書館の運営に学生の意見を積極的に取り入れている。21 世紀の最重要テーマである「環境」と「情報」に関する先進的な専門教育と多様な研究活動を展開する「環境情報学部」の図書館として、関連する図書・雑誌資料や電子資料を収集し、利用に供することを使命としている [1]。しかし、昨今耳にすることの多い「図書館離れ」が、横浜キャンパス図書館でも入館者数の減少という形で現れている。そのような状況の中で、管理・運営を担う図書館委員と利用者の立場である学生モニターとの協働は、重要な意味を持つ活動となっている。本稿では、横浜キャンパス図書館における現在までの取り組みを学生モニターの視座から総括するとともに、今後の発展に向けた提案を示す。

キーワード：利用者支援、利用者教育、情報リテラシー、レファレンス・サービス、学生満足度

1 はじめに

横浜キャンパス図書館は、横浜キャンパスが開設された 1997 年 4 月に情報系施設「情報メディアセンター(注 1)」の一部として開館し、2013 年 4 月で 18 年目を迎えた。開館当時から、「情報」と「図書」が融合したハイブリッド型図書館になることを見据えていた。また、情報メディアセンターは外語教育と密接に関連した施設としての役割も担って設立されており [1]、「情報」「図書」「外語教育」が共存するような施設運営が行なわれている。

図書館が提供するサービスは、図書・雑誌等資料の貸出・閲覧サービスだけではなく、情報検索サービス、レファレンス・サービスなどの人的サービス、学外資料の利用の手配を行なう ILL サービス、学習環境の提供など、サービスの内容は多岐に渡っており、利用者の様々なニーズに応えられる環境にある。

しかし、入館者数を環境情報学部の完成年度にあたる 2001 年から年度ごとに比較すると、長期的に減少している。また、2005 年に実施された利用者実態調査によれば、「単純に本がある場所」というイメージが強く根付いていることが示されている [2]。

これらのことから、図書館が提供しているはずの様々なサービスや本来持つべき役割が十分に活用されていない可能性が指摘できる。これはただ単に数字だけの問題ではない。

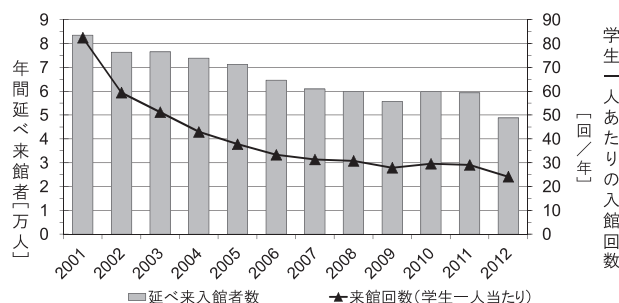


図1 図書館来館者の推移 (注2)

大学図書館は、各大学の学習・研究活動を支援する施設であり有用な情報源でもある。しかし、高度情報化が進みインターネットを通じて大量の情報が手軽に入手可能となった現在においては、図書館に足を運び資料を利用する人が減少する傾向、いわゆる「図書館離れ」が指摘されている。図書館サービスの有効活用を促し、学習・研究活動などの学生生活の充実につなげるために、まずは図書館の認知度向上を目指して「行かなくてよい場所」から「行きたくなる場所」にする仕掛け、が必要であると考える。

現在、世田谷・等々力キャンパスを含めた本学図書館は共に所蔵資料や各種サービスの充実などに取り組み、より多くの利用者にとって「行きたくなる図書館」「活

ARAI Syohei
 東京都市大学環境情報学部環境情報学科2012年度卒業生
 HORIGUCHI Ken
 東京都市大学大学院環境情報学研究科博士後期課程
 HAYASHI Maki
 東京都市大学事務局教育研究支援グループ学術情報センター
 横浜キャンパス図書館担当

用される図書館」となることを目指している [3] が、目標の達成にはまだ遠い状況といえる。そこで、学生・教員・職員が三者一体となり議論・行動を起こしていく必要があり、そこで重要な役割を担うのが「図書館モニター制度」である。

2 図書館学生モニター制度の概要

「図書館学生モニター」は毎年度のはじめに、横浜キャンパスに所属する学部生・大学院生から参加を募り、例年 10 名程度で構成されている。2012 年度については、大学院生 1 名、学部生 7 名で構成された。その活動は、図書館の活性化を目的とし、図書館における学生満足度の向上と、さらなる発展が期待されている。

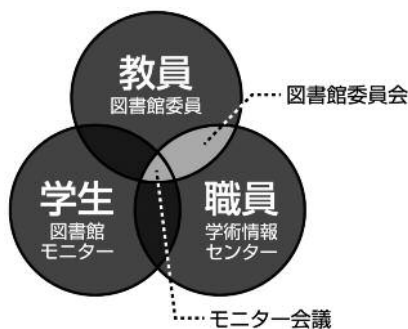


図2 モニターと教職員との関係

前期・後期に各 1 回ずつ開催される図書館モニター会議では、図書館委員の教職員と学生モニターが一堂に会し議論を行う。会議で出された意見は、教職員で構成される図書館委員会において実現の可能性などを含めた総合的な議論を行うこととなっている。つまり、学生モニターの意見が、そのまま図書館委員会で議論されやすい体制となっている。



図3 図書館モニター会議の様相 [4]

3 学生の視点からの問題提起と解決への取り組み

これまで、学生モニターから多くの問題提起が行われてきた。もっとも大きな問題は、前述した入館者数の減少であるが、関連する様々な問題も挙げられた。

- ・図書館を知るきっかけの提供
- ・蔵書増加への要望
- ・視聴覚資料に対する貸出要望
- ・少人数学習スペース環境の改善
- ・その他施設や付帯設備の改善

これらの問題点を解決する方法として、

- ・図書館ツアーの実施
- ・選書ツアーの実施
- ・AV ブースの増設及び音楽 CD の貸出
- ・グループスタディルーム利用環境の改善
- ・図書館入館ゲートの入れ替え
- ・館内作業パソコンの設置

が実施され現在に至っている。個々の内容について、以降に詳細を記す。

3.1 図書館ツアーの実施

大学に付属する施設として図書館が存在しているが、学生の図書館に対する利用意識が低いことは前述のとおりであり、利用価値を高める必要があるという提案がモニター会議で提案された。そのことから、図書館の概要やデータベースの利用法などの説明を行う「図書館ツアー」を 1998 年から行っている。環境情報学部共通科目 [人間・環境・情報] (注 3) の一つである、「情報リテラシー演習」の 1 コマ 90 分のうち、約半分の時間を当てている。この科目は、横浜キャンパスに所属する学生の 90% 以上が履修する科目であることから図書館を認知するきっかけとしては大きい。



図4 図書館紹介スライド

3. 2 動画での図書館紹介

情報基盤センターの学生プロジェクトである“SRG (注 4)”が動画版図書館利用案内を作成している。ビジュアル的にわかりやすい情報提示方法であると考えている。基本的には毎年更新する形を取っているが、構成人数の関係で更新頻度が低下している。制作された動画は、動画共有サイト“YouTube”にアップロードされ、全学図書館のページほか、様々な場所から閲覧が可能となっている。



図5 アップロードされた動画

3. 3 選書ツアーの実施

学生が実際に書店に足を運んで選書を行う「選書ツアー」や取引業者からの選定図書から最終的に購入を行う図書を選定する「学内選書」も実施してきた。様々な書籍に触れる機会が増えることから、学生に人気の企画である。日程の設定や年度あたりの開催回数によって参加者数の増減が大きいが、参加者からは満足の声が多く聞かれているため、今後も継続して実施するべきと考える。



図6 選書ツアー [5]

3. 4 AVブースの増設及び音楽CDの貸出

図書館では紙媒体の資料だけでなく、DVDやCDなどの視聴覚資料も所蔵している。蔵書数を本学3キャンパスで比較すると、横浜キャンパス図書館の視聴覚資料数が最も多い。2012年9月現在の視聴覚資料を含めた各キャンパス図書館の蔵書数は次の通りである。

表1 資料蔵書数 [6]

キャンパス	世田谷	横浜	等々力
図書 [冊]	265,521	113,637	176,512
雑誌 [タイトル]	2,210	408	466
視聴覚 [タイトル]	3,586	4,487	491

映像資料は著作権の関係上、基本的に館内利用に限定されている。そのため、視聴の際は、図書館内に設置された視聴覚用ブースを利用することになる。ただし、開設当初のブース数は、学生数・資料数に対して充分とは言えない環境であった。これに対して学生モニターより問題提起があり、増設された。



図7 AVブース

また、音楽資料に関しても開館当初は館内での使用に限っていた。しかし、貸出への要望が多数寄せられたことから運用を見直し、世田谷キャンパス図書館と同様に貸出を行うことで、利便性が広がった。

3. 5 グループスタディルーム利用環境の改善

横浜キャンパス図書館には、小規模のグループで資料探索や簡単なグループ学習が行えるグループスタディルームを設置しているが、運用方法について多くの要望が出された。その意見を踏まえ、プロジェクトの貸出実

施、部屋を分割して利用することが可能なホワイトボードの仕切りの設置などの改善を行った。

3. 6 図書館入館ゲートの入れ替え

横浜キャンパス図書館では、入館ゲートで学生証・教職員証の認証を行い、入館履歴の管理を行っている。しかし、経年劣化により多発する認証の不具合に対する利用者からの声に応え、2011年に入れ替えを行った。

3. 7 館内パソコンの設置

横浜キャンパス図書館にも禁帯出資料が数多く存在するが、2号館内に併設する情報系施設「情報基盤センター」内であっても、館外への持ち出しは禁止されている。コピー機によって紙に複写することが通例であるが、情報化社会を見据えた上で電子ファイル化することが利便性向上につながるという意見が出された。その意見を踏まえ、図書館入口脇にパソコン、ドキュメントスキャナー、プリンターが設置された。これにより、紙資料の電子化や資料に付属するディスクデータの閲覧や検索が可能となった。

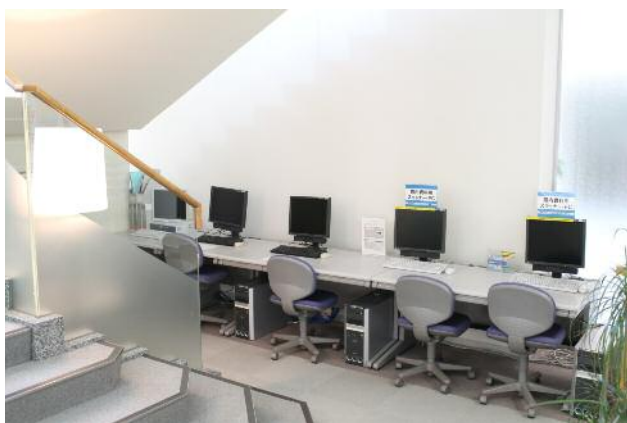


図8 館内パソコン群とスキャナー

4 課題と今後の展望

ここまで、学生モニター会議で学生から寄せられた図書館に提起した課題とそれに対する改善の試みを紹介した。マクロ的な視点で実施される利用実態調査では把握しにくい日常的に利用している利用者が感じている不便さに対するきめ細かな指摘が多いのが特徴である。これらの試みの成果の客観的な検証については今後の検討が待たれるところであるが、大学図書館の最大の利用者である学生の利用者ニーズが取り込まれたことで、より利用しやすい図書館になったと思われる。

本章では、これらに対し、学生モニター会議で提起されたものの今後の検討課題として残された議題として、「情報リテラシー教育の強化」や「ラーニング・コモン

ズの実践」、「図書館における人的支援サービスの利用促進」を取り上げながら、今後の図書館に期待するところをまとめた。

4. 1 情報リテラシー教育の強化

3. 1節で述べたように図書館ツアーの実施により図書館利用教育を通じて図書館利用の促進を図っている。しかし、その取り組みが直接の入館者増加の効果を生み出せていないことは入館者数の推移(図1)からも読み取ることができることから、さらなる改善が必要であると考え、多種多様なデータベースを利用者へのサービスとして提供しているが、環境情報学部の学生利用度は多くはない。その理由のひとつとしては、情報リテラシー教育の不完全性が考えられる。情報リテラシーを考えるうえで、教員と職員の連携が必要である。その連携は、互いの情報交換や現在の状況を把握ことで解決することで可能であると考え、リテラシー教育に対するアプローチとして“スキル志向教育”と“利用者志向教育”の二つ[7]をバランスよく教育することが重要[8]であるといわれるが、現状ではそれが生かされていないと考えられるため、講義として図書館をどう扱うのかについては十分な議論の必要がある。

4. 2 ラーニング・コモンズの実践

世界的には「ラーニング・コモンズ」という考え方が推進されてきているが、「図書館モニター会議」や“学生と大学のこんだん会”でもそのような意見が出された[9]。ラーニング・コモンズとは、学生が集って学習するためのスペースを指し、国内では立教大学や上智大学を始めとする多くの大学図書館で実践されている。静かな室内に書架と閲覧席があるという典型的なイメージの図書館とは異なり、デジタル機器やホワイトボードが設置され、活発に討論しながら学習を進めるためのスペースであるのが特徴である。横浜キャンパス図書館においても、自学自習の場としての役割に、議論を進める場所という付加価値を加え、情報の収集、加工から発信までを通した能動的な「問題解決型」の勉強を実践できる場としての側面を強化することが求められる。

4. 3 図書館における人的支援サービスの利用促進

最後に、図書館における人的支援サービスの利用促進に関する提案をまとめる。図書館の基本的な役割は、図書資料を収集・整理、保管し、利用者の利用に供することである。図書館は“書架があり、資料を無料で閲覧できる”というイメージが強いようであるが、現代の図書館の在り方に大きな影響を与えたランガナータンによる「図書館学の5法則」によれば、資料を収集し保管するだけではない。資料に精通した図書館員が利用ニーズに

合わせて図書館資料を提供することもまた、図書館の重要な役割の一つであるとされている。このような図書館サービスは「人的支援サービス」と呼ばれ、その代表的なものに「レファレンス・サービス」が挙げられる。レファレンス・サービスとは、利用者からの資料探索や資料の利用に関わる質問に対して図書館員が個別に回答するサービスである。例えば、『紛争鉱物』という言葉の意味とその背景事情を調べたい」といった質問に対して、資料の探索方法をアドバイスしたり、必要な資料が他館から取り寄せ可能かどうかなどを調べたりする。本学図書館の利用実態調査 [2] によれば、レファレンス・サービスの存在は図書館利用者の間になかなか浸透しておらず、認知度は決して高いとは言えない。しかし、2013 年度から本キャンパスに設置された環境学部とメディア情報学部は研究対象とする学問領域が幅広いことから、入門書として扱えるテキストが少なく、学び方もまた、学生一人ひとりが自ら考えなければならない。それゆえ、勉強に必要となる資料が人それぞれであり、その学生に合った資料探しの支援が必要であると想定される。大学図書館として、学問領域や専攻の枠を超えた横断的な学習支援としてのレファレンス・サービスが必要であり、また、そうしたサービスの利用を促進することで学生の学習や研究活動がより活発になることが期待できる。

5 まとめ

本稿は、これまで学生モニターと図書館委員会が共働で行った事例を紹介した。キャンパス開設当初の草創期から現在に至るまでを振り返ることで、さまざまな努力が見えてきた。過去の様々な活動を積み上げてきた横浜キャンパス図書館の存在価値を高めていくためには、これからも学生・教職員が一体となってアイデアを出し合い、常に革新をし続けることが重要であると考えて、今後の発展に期待したい。

謝辞

本稿を執筆するに際し多くの有益な情報提供や助言をいただきました。学術情報センターの八重樫真理様、また執筆の際に後押しをしてくださった同センターの大野昭彦係長、上田寛子様がこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 国分 栄, 情報メディアセンターの誕生とその課題について, 武蔵工業大学 環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル, No.2, pp.80-83, 2000
- [2] 武蔵工業大学環境情報学部図書館: 環境情報学部図書館の現状—学生アンケート報告, 2005

- [3] 東京都市大学, 第 11 章 図書電子媒体等, 点検・評価報告書, pp.355-371, 2009
- [4] 鈴木誠也, 第 1 回図書館学生モニター会議 実施, 東京都市大学新聞, No.6, 2010
- [5] 荒井翔平, 図書館モニター学外選書ツアー 開催, 東京都市大学新聞, No.6, 2010
- [6] 東京都市大学, 2013 大学案内, p.28, 2012
- [7] 瀬戸口 誠, 情報リテラシー教育とは何か: そのアプローチと実践について, 情報の科学と技術, Vol.59, No.7, pp.316-321, 2009
- [8] 日向良和, 情報リテラシーを意識した図書館ガイダンス — 都留文科大学の実践例 —, 都留文科大学研究紀要, No.73, pp.95-111, 2011
- [9] 東京都市大学学生部, 平成 23 年度 横浜キャンパス「学生と大学とのこんだん会」記録, p.6, 2011

脚注

- (注 1) 2013 年 3 月現在は、3 キャンパス統一の組織として図書館・情報基盤センターに改編されている。
- (注 2) 入館者数は図書館委員会資料より作成。教職員の入館者も含む。学生数は各年度 5 月 1 日現在。
- (注 3) 2013 年 4 月の 2 学部への再編後は、基礎科目 [教養] (必修、ただし社会システム学科は選択科目) となる予定。
- (注 4) Student Research Group の略。